

もうひとつの戦災

— 沖縄県波照間島にて —

山田英美

ハテルマという島の名前は、日本の南の端（ハテ）に位置する、サンゴ（ウルマ）の輝く島という意味なのだ、地元の人言う。そこには美しい海と清浄な空気と平穏な生活があった。島の人びとは島全域で牛や豚やニワトリを飼い、海で漁をし、サトウキビを育てる畑を耕すという生活を享受していた。

時は第二次世界大戦の末期、その波照間島に住む子どもたちが一挙に大勢亡くなるという悪夢のようなできごとがあったという。沖縄本土の陸上戦のことは知られているが、直接の侵攻はなく、空爆も受けなかった離島である。それなのに、なぜだろう、何があったのだろうか。そういった疑問を抱いた女子学生二人が、当時のことを知っている人たちから現地^{いりあてじま}で話を聴きたいと言う。彼らの希望をうけて、私は二人とともに西表島と波照間島を訪ねた。二〇〇九年の夏の終わりだった。

西表島で民宿を経営している七十代のH氏が、私たちの旅の目的

を知って船着き場から車でいきなり南側の海岸に連れていってくれた。うっそうとしたジャングルのような森を抜けると、遠浅の砂浜があった。陽光に照り映えるさざ波がどこまでも続く海原のかなたに、波照間島のシルエットが望まれた。H氏は

「ここに強制疎開させられた波照間島の子どもたちは、故郷の島に帰りたいと、あの島影を見てよくたずんできたそうです」と話してくれた。海岸の岩場には、当時の小学校の識名校長が生き残った子どもたちを連れて帰る前につるはしで岩石に刻まれたという、「忘勿石 ハテルマ シキナ」という文字があった。校長が胸中の涙をふり絞って、つるはしを振るわれた痕を見るようであった。

Hさんの奥さんが波照間島の出身ということで、その夜に、直接の経験談を聞くことができた。子どもたちの集団強制疎開のいきさつはこうである。

戦況が次第に厳しくなるにつれ、**島に置かれた日本の軍隊本

部にも疲弊の色が濃くなっており、波照間島で飼われている家畜がよい栄養源として目を付けられた結果、軍部が敢行したのは島民たちの即刻立ち退きだった。それには何らかの口実が必要である。某将校が

「この島にもうすぐ敵軍が攻めてくる。危険だから全員、西表島へ移るように。もしこの命令に従わない者は、ここですぐに切る！」と、刀を抜いて脅したという。村人たちは、ここで切られて死ぬよりは……と苦しい選択のすえ、島民は一人残らずカツオ漁の漁船六艘に乗せられた。

学童たちが送りこまれたのは、戦闘機から身を隠せるからと、マラリアが蔓延しているとわかっていた西表島の南海岸沿いの森林地帯である。

子どもたちは、はじめの頃はふだんとちがう環境で、ある種の冒険ごっこのように海で泳いだり、海岸で先生たちが教えてくれる青空教室の勉強を楽しんだりしていた。ところが間もなく、マラリアをはこぶ蚊が容赦なく襲いかかって、人々は次々に震えが止まらない程の高熱を発して倒れていった。その状況に悩んだ校長先生が、自分の生命も顧みず何度も軍部と掛け合って、安全な波照間島への帰島を実現させた。しかし、米軍が配給していたというマラリアの特効薬も島の人びとには十分与えられなかったので、帰島後にも亡くなる人が続出した。二千人あまりの島民のなんと四分の三が死亡したそうである。

翌日私たちが渡った波照間島は、どちらを向いても背の高いサトウキビの畑で埋めつくされており、海岸をめぐる道路には、パイナップルに似た大きな実をつけたアダンの高木が潮風になびいていた。初めに訪ねた波照間小学校の、校庭のはずれに建てられている学童霊碑には『前略—*の行為は ゆるしはしようが 然し わすれはしない』とあった。

マラリア禍からかうじていのち拾いをした子どもたちが、戦後を生きて、いま高齢を迎えておられる。私たちは波照間島の「すむずれの家」というデイサービス施設を訪ねた。「すむずれ」とは「心もち寄る、輪になる」という意味の方言だそうです。

六十代から九十代の高齢者（一人以外女性）十人ほどが、島のサトウキビから作った黒糖をお茶受けにしながら、思い出さたくないほど苦しかった時のことを、「若い人たちには聞いておいてもらいたいので」と次々に語ってくださいました。

「島に上陸すると、たくさんある木の枝という枝が黒く垂れ下がっているの。不気味な光景に近づいてよく見ると、殺された家畜の残骸にたかって肥満したハエが重なり合ってびっしり止まっていたのね」

「島に帰っても食べ物がありません、海辺でモスクを拾ったり、ソテツの幹の皮をさらして粉にして食べた。それもおいしかったで

すよ。」

「島に着いてからマラリアを発症して亡くなった親戚の人をムシ口にくるんで海岸に運んだ。感覚がマヒしてなみだも出なかった」

「十一人いた家族のうち、いちばん小さかった娘一人だけが助かった家もある。ほら、あの人」

「村の賢い男の人が、こつそりと豚とニワトリを二、三匹ずつ山の奥深いところに放しておいて島をはなれたが、それらがそのうち増えて、たすかったそうですよ。海には魚介がいてくれるし」

たくさんの苦しい思い出の中にもきらりと言葉の端にのせて語られた印象的なことがあった。それは、西表島の民宿でも聞いたのと同様のことで《子どもには健康で遊びがあれば、どんな状況でも楽しむ力が天与として備わっている》ということを確認させる彼らの想い出の場面の表現であった。

また、すむずれの家であったどのお年寄りも、意外なほど澄んだ上品な雰囲気と、おちついたたずまいをまもっておられることに不思議さを感じた。それは、ソウル・パワーとでもいえるこの島の持っている力が、かれらが戦後を生きる日々の支えになったことを彷彿させた。

帰郷後私は、福祉学科の学生たちに取材旅の報告をし、彼らにレポートを書いてもらった。何人かの感想をまとめると次のようである。

「このことは、以前に学んだ北海道のアイヌの人達に対する差別とおなじように、沖縄の人びとに対する差別意識によるいのちの軽視が、本土の、特に支配層の人びとにあったためではないのか、そして、このような苦しみの中で多くの命が落とされたことは、直接爆撃されなくても、戦争の被災者に他ならない。私たちは、そういう現実にあつた出来事を話してもらわないと、まったく知らないで過ごしてしまう。《忘れ去ってはならない》とよく言われるが、それ以前に、《知らないこと》も同じように深刻な問題ではないのか」
こういう率直な意見にこたえるための、年配者の役割を思ったことである。

〈キーワード〉

島、マラリア、差別意識